

## ポートランドの檜の木の下で

2013年8月17日。早朝に自宅を出て神戸空港から羽田へ飛び、そこからバスで成田国際空港に辿り着く。前夜の徹夜が功を奏し、機内は爆睡。ポートランドに到着したのは8月17日の朝。同じ日をもう一度やり直すことになる。生まれて初めてのアメリカ。空港が全て絨緞敷きなのと、抜けるような青空と、蚊がいないことに驚く。PSUのコアスタッフに出迎えられ、バスで大学へ。車の右側通行に違和感を覚える。身についた習慣は理屈では解決しない。

1週間滞在する大学の寮に荷物を置きに行く。ベッドと机だけの部屋。テレビがなく、間接照明なのに驚く。驚いてばかりだ。そのままスタッフの案内でキャンパスツアーへ繰り出し、学内で開催されているファーマーズマーケットでランチ。鮮やかな色の野菜や花が売られ、音楽を奏でたり踊ったりする人たちを尻目に、天邪鬼な私はホームレスが多いことを発見し、また驚く。学内の中心部の渡り廊下に、**Let Knowledge Serve City**と刻まれているのが印象的。午後、PSUの西芝雅美准教授からプログラム趣旨説明を受け、明日の市内探索に関する最終議論を行う。事前準備として議論していたものの、いざとなると方向性が定めにくく、「ポートランドを感じる」というテーマになる。キーワードは、持続可能性、農業、子ども。

8月18日午前9時、市内探索に出発。他のチームは自転車を使うが、私たちのチームは公共交通を利用。まずオーガニックで有名なスーパー「シーズズ」へ。出口で待ち構えて、男性一人と、父と子一組にインタビュー。オーガニックを購入するのは子どものため、と言われ、なかなか話が続けられない。歩いてピープルズ・コープへ移動。入り口で腰掛けていた父と子に声をかけると、なんと市民活動家。これ幸いと地域活動を聞く。「買うことで地域を支え持続可能性を担保している、NPOの職員として公立学校のソーシャルワーカーをしていたが、教育はとても大切」等、興味深い話。

バスでモンタビラ・パークへ行く。マーケットが開催されているという話だったが、場所を間違えたようだ。子どもを連れた車椅子の女性に声をかけると、なんと4世代家族。公的扶助を受けて生活しているという。「教育がないから行政は相手にしてくれない。困ったことはソーシャルワーカーが解決してくれる」と。ダウンタウンへ移動し、書店パウエルでLGBTQのコーナーに行く。ゲイのカップルが仲睦まじく本を選んでいる。多様性を実感。パール地区を歩き、ビーバートンから来た4世代家族にインタビュー。「教育はビーバートンの方がいいけど、この公園は落ち着くからよく来る」と。8人にインタビューをして、うち3人から「教育」という言葉を聞いたが、内容は全く違っていた。

8月19日。午前中は市内探索のリフレクション。同じ場所に行ったグループもあったが、それぞれ拾い上げたものが違う。ランチミーティングのあと、プログラムのコーチのダン・ヴィッティーニ氏から、アメリカの地方行政に関する講義。「ガバメントは市民の所有物」という言葉が重かった。

終了後、イブニングサイトビジットへ。市北東に位置するコリー地区で低所得者支援に取り組むNPOベルデへ。トレーラーハウスが並ぶ中に、法人所有のアパート、エコループの運動場、「緑のための1%」と呼ばれる緑地、菜園などが点在。代表のアレン氏は、「コリー公園の建設はストップしていたが、私たちに作らせて欲しいと申し出て、ピアである他団体と連携している」と、現在の事業展開を説明。貧困、教育、ジョブトレーニング、環境保全などが、ひとつの事業に収斂され、他団体とのパートナーシップのもとに進められている。公園予定地から見る月は、本当に美しかった。

8月20日。バスでクラカマス郡へ。市民団体アーバングリーンの代表・チップス氏から、マックス駅舎建築計画について聞く。メトロ、郡政府、トライメットからの依頼を受け、地元にとって良いものになるなら協力する、と始まった計画は、今ではトライメットが自信をもって自分たちの計画として語るほどのものとなり、2年後にマックスが開通する予定。「私たち自身のローカルなコミュニティに焦点を当てて、できるだけ多くのステークホルダーを巻き込み、どんなアイデアも馬鹿らしくも狂ってもいい」と話すチップス氏は、素晴らしい経歴と手腕の持ち主なのに、アーバングリーンの規模を拡大する気はないと断言した。「ここは昔のように檜の木の森になる」と聞き、そこに立っている檜の木のどんぐりを取ってもいいか尋ねると、好きなだけどうぞ、と。日本のどんぐりと違って、丸くて大きい。

ダウンタウンに戻り、メトロ庁舎へ。メトロは、ポートランド地域の住民による直接民主制で運営される地域政府で、エリア内のクラカマス郡、マルトノマ郡、ワシントン郡の3郡と25の市、130万人以上の住民とパートナーとして協同している。公園の手入れ、土地の最大活用、ごみの処理の管理とリサイクルなど、開かれた空間を保護する事業を展開し、公共交通システムの調整などのサービスも提供している。連邦政府、オレゴン州政府からも独立した、アメリカ唯一の選挙民に承認された自治憲章をもち、住民の直接的な投票によって、課税権までも保持するに至った世界でも珍しい先進的な地域政府である。ここでも「全てのステークホルダー」という言葉を何度も聞いた。文化的差異への配慮、草の根団体に対する助成への関心向上と橋渡し、地域から見たときに行政が継続性を保てるよう、常に組織内でのシェアに努めるなど、とても地道で愚直な

姿勢を感じた。そのままリフレクションを行い、市民との信頼関係構築、市民リーダー養成、市民主体プロジェクトの増やし方、組織内コミュニケーションなどについて話し合う。

イブニングサイトビジットはマルトノマ・ネイバーフッド・ハウスへ。1905年に移民問題への対応を目的にスタートしたネイバーフッド・ハウスは、今ではネイバーフッド・アソシエーションや商工会とのパートナーシップのもと、地域を包括したソーシャルサービスの提供を行っている。代表のリック氏と、前代表で商工会長のランディ氏の案内で、古い消防署を改造した事務所や、ホームレス支援のためのフードボックスのバックヤードなどを見せていただく。平等、教育、食料、接近性、住宅などがテーマとされ、社会福祉や慈善だけでなく政治と社会正義を、という言葉が心に残る。

8月21日、市役所へ。議事堂内で模擬議会体験のあと、都市計画のエキスパート5名からの説明と議論。耐性のある都市に必要なものは、変化と、パートナーシップと、適応。PSUに戻り、イノベーション・ラボ。「裏庭にコンポストが建つ？」というテーマでグループワーク。かなりエキセントリックな案も出て、前例にとらわれないこと、既成概念なく考えること、先に結論を決めてしまうと失敗すること、を体験。

8月22日、都市計画及び持続可能性対策局へ。ポートランド・プランについて、主任プランナーのデボラ氏と同僚のマーティ氏から説明を受ける。策定の経過、アップデート中の内容、伝統的都市計画手法が機能しない現状、コミュニティ担当制、人間関係の構築と維持、へりくだりと内省。プロフェッショナルは、やはり愚直だ。午後はポートランド開発局へ。産業開発担当の山崎マネージャーから説明を受ける。都市開発のリスクを取り、人・金・パートナーを持ってするのが開発局の仕事。都市開発の手法は、場所作りから産業づくりにシフトしている。続いて、インタートワイン・アライアンス代表マイク氏の講義。自然そのものをステークホルダーと考え、生態系保全には様々な考えや協力が必要、という見地に立つ。夜はギリシャ料理店で「ピラスト」。

8月23日、ポートランド研修のまとめの話し合いを、市内探索のチームごとに。発表。何の抵抗もなく、「常にクール」というポリシーに反して、熱くスキットを演じてしまった自分に驚く。そして卒業式。ガウンと帽子を身につけ、修了証明書をいただく。最後の夜は、日本庭園でのフェアウェルパーティーで始まり、PSUの酒場で過ぎて行った。

トランクに詰めて持ち帰った、青いどんぐりの実。それは私に、風そよぐ深い檜の木の森を想像させる。檜の木は天蓋となり、鳥とコヨーテと人と、水と空気を包み込み、美しいネイバーフッドを作り出す。森に溶け込む駅舎から始まるMAXはPortlandへ向かう。檜の木の下で続いて行く、小さくて満ち足りた暮らし。生まれて生きて死ぬことを、何世代も続けて行ける場所。

檜の木の森を作ろう。私たちは、私たちの、檜の木の森を。ポートランドは終わってはいない。異国の空の下で揺さぶられた感覚と感性。PSUで叩き込まれたLet Knowledge Serve Cityの精神。私のこころとからだで、私のまちに奉仕しよう。平成7年4月1日、瓦礫だらけのまちの中で、私は、全体の奉仕者として公共の利益のために尽くすと宣誓した。そのことを決して忘れずに、私の仲間と、私たちのまちで、私たちの檜の木の森を作ろう。

